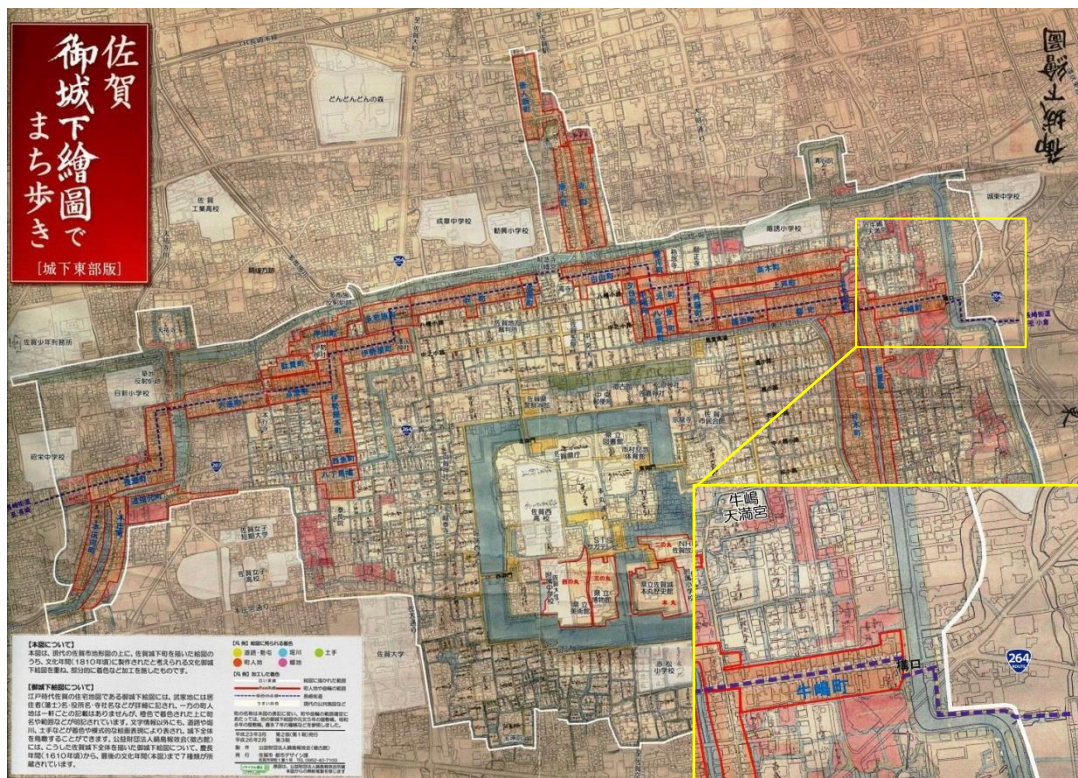




江戸時代、この場所は佐賀城下を東西に延びる長崎街道の東入口にあたり、現在も城下町や宿場などの入口を示す「^{かまぐち}構口」の呼称が残っています。明治時代以降、往時の面影は失われていきましたが、市民の方から土地の寄付を受け、公園整備に伴う発掘調査によって、埋もれていた地域の歴史を物語る痕跡が現代に再び姿を現しました。



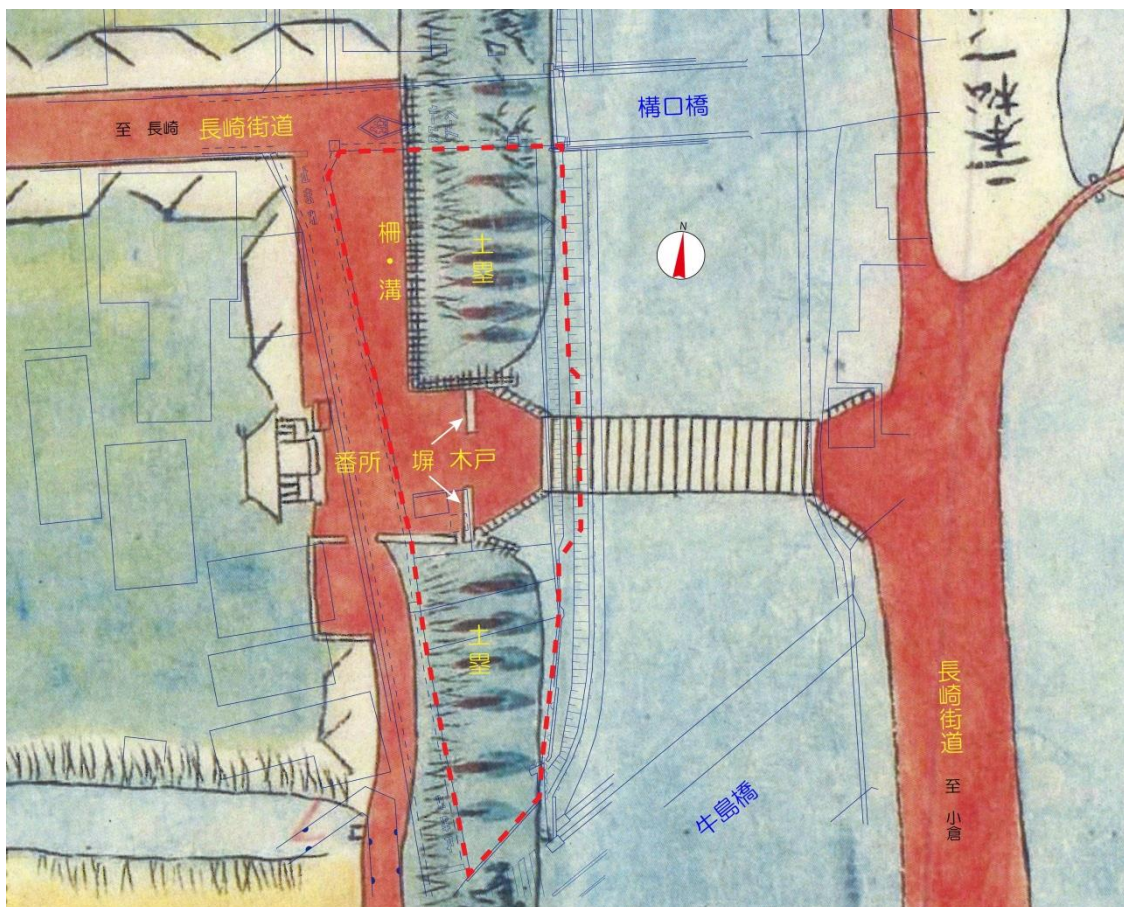
文化年間（1810年）頃に製作された文化御城下繪圖と現代の都市計画図を重ねた図

1. 佐賀城下東入口 牛嶋口

江戸時代、佐賀城下には、牛嶋口、八戸口、今宿町口、唐人町口、多布施町口、天祐寺町口の主に六つの入口があり、木戸や番所を設けて通行人を監視していました。牛嶋口公園があるこの場所は、佐賀城下を東西に延びる長崎街道の東入口である「牛嶋口」にあたります。佐賀藩にとって交通・軍事の要衝地であるこの場所は、江戸時代の初め頃から整備が進められ、1785年(天明5年)に製作された『巨勢郷牛嶋村絵図』【公益財団法人鍋島報效会所蔵】(以下「牛嶋村絵図」という)をみると、川の両岸に台形状に張り出した土台に橋が架かり、城下側に木戸と思われるもののほか、番所、柵、土塁、溝などで閉鎖的空間が描かれています。当時の橋は、現在の構口橋と牛島橋の中間あたりに架かっていたと考えられていましたが、詳細な位置はわかっていませんでした。

トピック

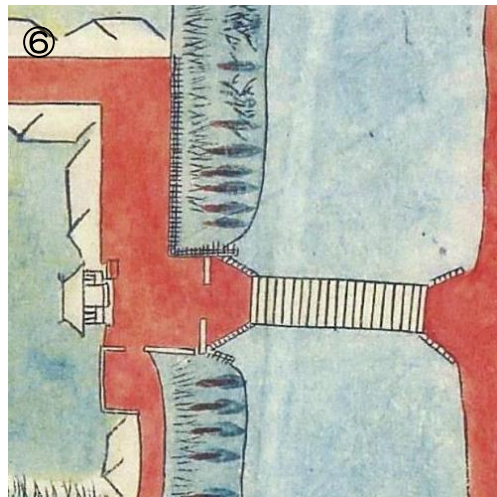
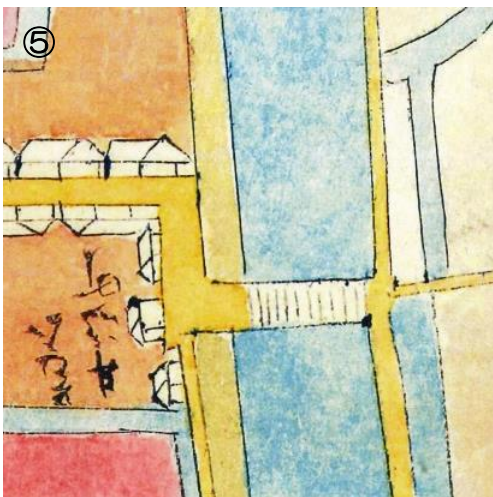
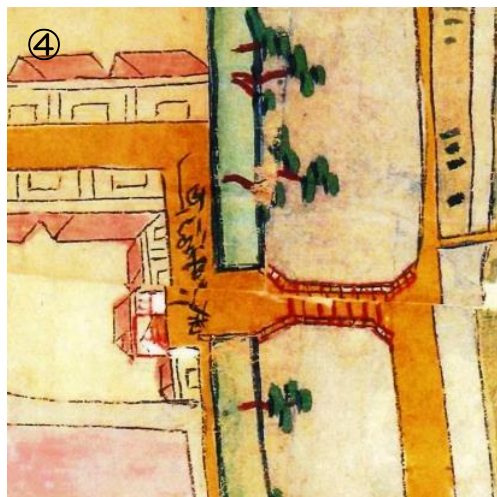
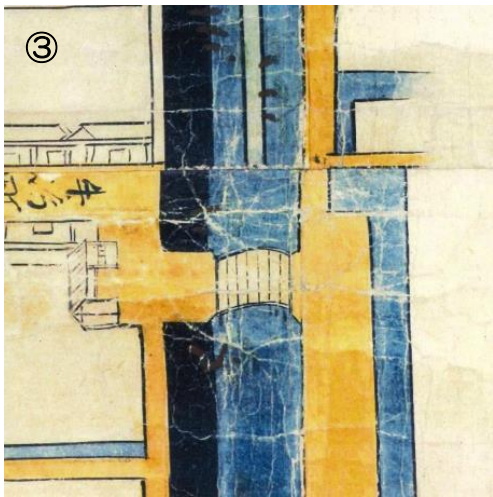
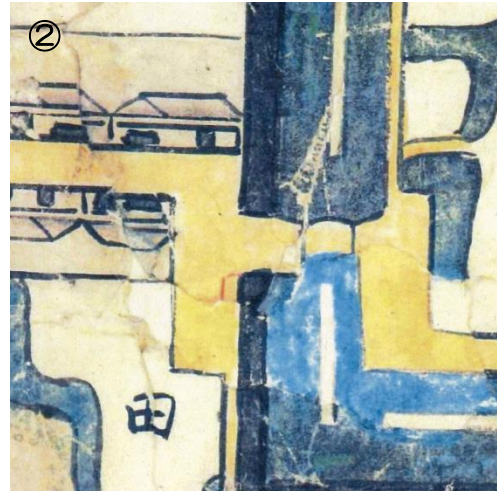
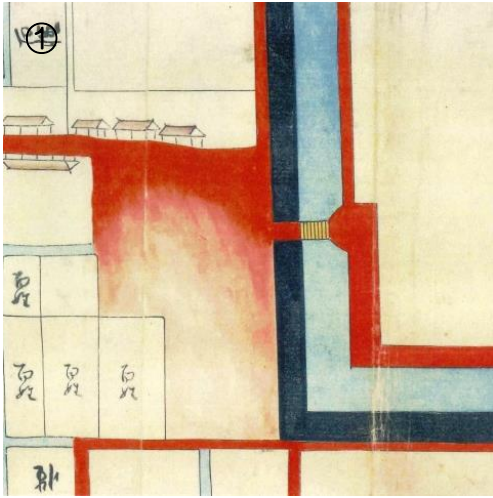
牛嶋口が位置する牛嶋町は慶長町とも呼ばれていました。佐賀城の築城とともに要衝地であったこの地域の整備が進められ、慶長年間に町が整備されたことから、このように呼ばれたと考えられます。



牛嶋口が描かれた絵図「巨勢郷牛嶋村絵図」1785年(天明5年) 公益財団法人鍋島報效会所蔵

※赤線破線範囲が公園範囲 青色線表示は現在の地図

江戸時代の絵図に描かれた牛嶋口



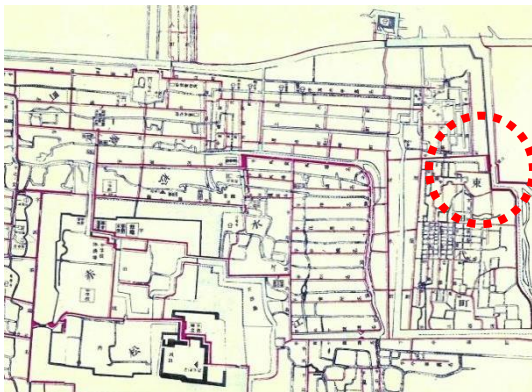
- ① 慶長御積絵図【部分】1610年（慶長15年）頃 江戸後期写
- ② 寛永御城并小路町図【部分】1626年（寛永3年）
- ③ 承応佐賀城廻之絵図【部分】1654年（承応3年）
- ④ 元文佐賀城廻之絵図【部分】1740年（元文5年）
- ⑤ 文化御城下絵図【部分】1810年（文化年間）頃
- ⑥ 巨勢郷牛嶋村絵図【部分】1785年（天明5年）

いずれも公益財団法人鍋島報効会所蔵

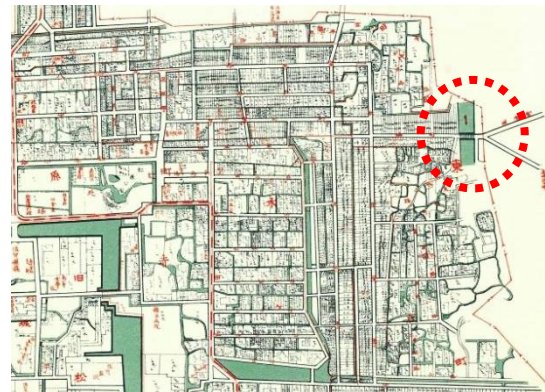
2. 明治時代以降の牛嶋口 ー遺構発見に至る経緯ー

明治時代になっても、しばらくの間は旧街道が主要道路として機能していたようですが、いつの頃からか、今の「構口橋」が架けられ、道路が北側に移ります。それに伴い古い橋は破却され、橋土台や木戸があった跡地には家が建ち、往時の様子はわからなくなってしまいました。その後、平成27年7月に市民の方のご好意で土地を寄附していただき、この場所を公園として整備することになりました。この計画に伴い行った埋蔵文化財の確認調査によって、江戸時代にかかっていた橋の土台部分の石垣が良好な状態で残っていることがわかり、この結果を基に、遺構を活かして公園を整備することになりました。

明治時代から現代の牛嶋口



明治32年（1899）頃の佐賀市街明細図【部分】
構口橋はまだない。（佐賀市史第三巻より）



大正時代の佐賀市街明細図【部分】
構口橋が架かっている。（佐賀市史第四巻より）



現代の牛嶋口周辺（現在の佐賀市東佐賀） ※青線枠が公園整備範囲

3. 牛嶋口の痕跡 -発見された遺構-

平成28年度に実施した確認調査で、地表面から50センチメートル程下で石垣や長崎街道の整地面を発見しました。石垣は築かれた台形状の形や位置が牛嶋村絵図と合致したことで、江戸時代に架かっていた橋の西側土台であることが明らかになりました。



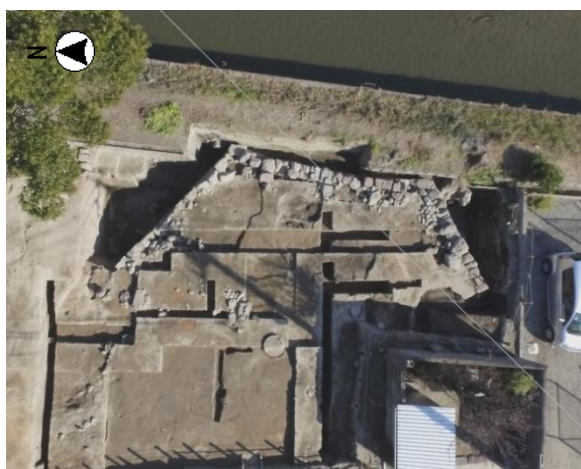
確認調査開始直後の様子（2016年5月）



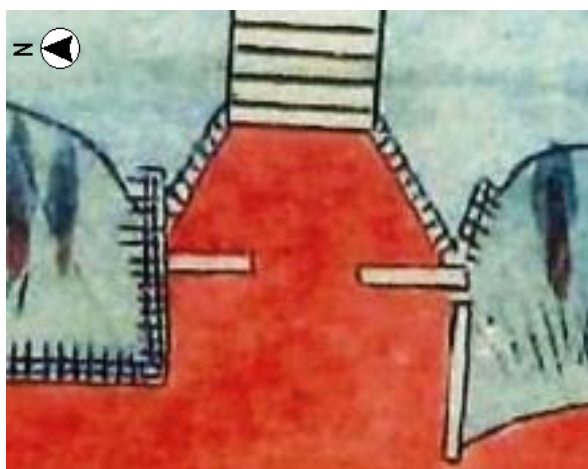
石垣発見の様子（2016年6月）

4. 橋土台 -絵図との合致-

土台は「牛嶋村絵図」の通り、川側に台形状に張り出す形で造られ、北面約6メートル、東面7メートル、南面約5メートルの3面に石垣が築かれていました。高さは明確ではありませんが、北と南面では7から8段目まで（高さ約2メートル程）、東面で4段目までを確認することが出来ました。この石垣が築かれた時期は、佐賀城の堀護岸にも使われている安山岩質凝灰角礫岩（通称「赤石」）が使われていることなどから西暦1800年前後頃と推定されます。ただ、積まれた石の中には、それより古い時代に加工されたものも含まれていることから、橋が初めて架けられてから長い年月の間に、幾度も修理が行われ、使える石は再利用していたと考えられます。また、別用途で使われていたものの一部を転用するなど、節約の様子がうかがわれる痕跡も残されています。



上空から見た橋土台部分（2016年12月撮影）



絵図に描かれた橋土台（巨勢郷牛嶋村絵図【部分】）

5. 石垣 -職人技による意匠-

石垣は全体的に丁寧なつくりで、湾曲させて積むことで倒れにくくする「輪取り」や、隅角を鈍角に仕上げる「シノギ角」など、城の石垣に通じる技術が用いられています。また、北面の石垣には、佐賀城の石垣などにも見られる「刻印」が施された積石も確認しました。このことから、この石垣の構築には、城などの石垣を築く技術を継承した集団が係ったことが考えられます。

また、石垣の表面は、見栄えがよいように削って整えているところが見られるなど、見せることも意識した造りとなっています。



橋土台を上から見た様子



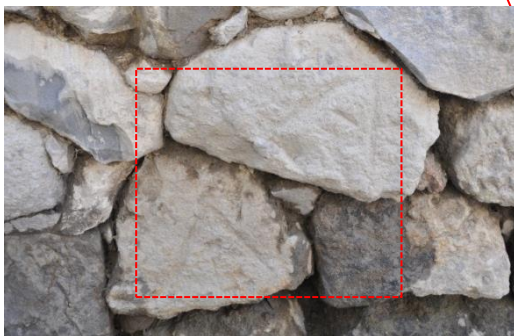
東面石垣 (2018年5月撮影)



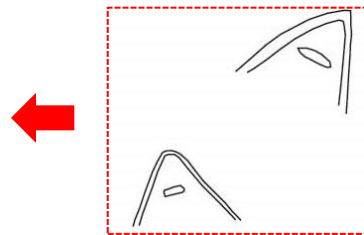
南面石垣 赤石や転用石などが使われている



北面石垣



刻印 (北面石垣)



6. 橋 -大きさと形-

橋は江戸時代の絵図や文献等の資料から木橋だったと考えられます。大きさを知る資料として、1812年（文化9年）伊能忠敬が佐賀城下を測量した時の日記に牛嶋口に関する記述があります。その内容は「牛島町人家限。右に番所あり。構口門を出ると直ちに牛嶋口橋、渡巾十一間、右欄干に繋ぐ、」と記していることから、長さは約20メートルだったことがわかります。また、幅は東面石垣の長さから推定すると、5～6メートルと考えられます。

橋の形状は、「牛嶋村絵図」やほかの絵図を見ると、平橋あるいは太鼓橋のどちらかが描かれています。今のところ、文献等の資料からは形状に関する情報は得られていないため、はっきりしたことはわかっていません。ただ、今回の発掘調査でその形を知る手掛かりとなる発見がありました。

木橋の骨組みは、敷板の下に縦方向の桁材、それを支えるための横方向の桁材を一定間隔で配し、その下に橋脚が立つ構造になりますが、土台の先端部分で桁材を支えたと考えられる「枕土台」の石組みを確認することができました。この「枕土台」は2.5メートル程の間隔で3箇所配置されていますが、いずれも川側にあたる先端が上向きの角度に設置されています。そのためその上に乗せた桁材も弧を描くように上向きに延びることになることから、橋の形は「太鼓橋」の可能性が高くなりました。

このように、発掘調査の成果と、絵図や文献などの情報から、牛嶋口には、長さ約20メートル、幅6メートル前後、欄干が付いた木製の太鼓橋が架かっていたと想像されます。

トピック

1729年（享保14年）、将軍徳川吉宗がベトナムから取り寄せたアジア象が長崎から江戸へ向かうため、佐賀城下の長崎街道を通った記録があります。象が通る街道沿いでは、「お象さま」に何かあってはいけないということで、様々な対策がとられたようです。ここ牛嶋口でも何らかの対策がとられたかわかりませんが、無事に渡りきったことは間違いないようです。体長6メートル、体高3メートル、体重5トンほどの象も通れる木戸、渡っても耐えられる丈夫な橋だったと想像されます。



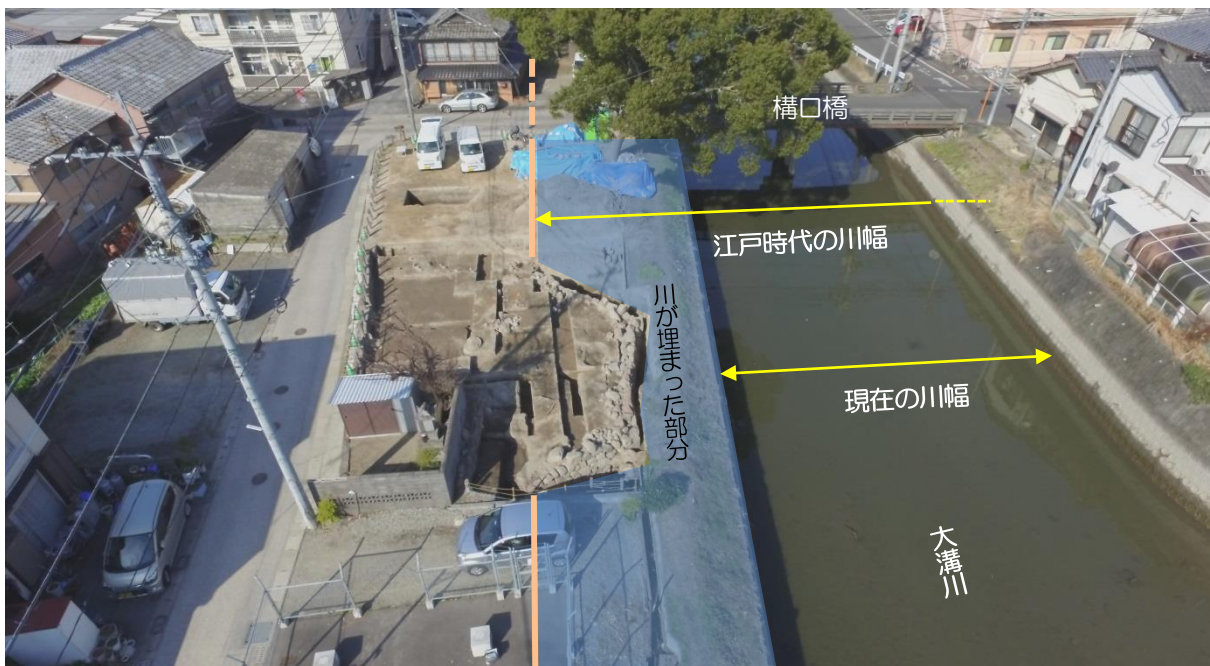
橋土台に設置された枕土台（桁材設置イメージ図）

7. 川の幅 -今と昔-

東側を南北に延びる大溝川は、佐賀城下東側の防御ラインで、北側防御ラインである十間堀川に繋がります。「牛嶋村絵図」には、川側に台形状に張り出した橋土台が描かれていますが、発掘調査では土に埋まった状態で発見されました。このことは、江戸時代の川幅は現在よりも広く、橋が使われなくなった明治時代以降、時間の経過や護岸工事などを経て、現在の川幅となったことを物語っています。

トピック

現在の護岸は昭和57年頃に工事が行われました。それ以前の護岸ラインは、発見された橋土台の先端あたりで、当時の図面には同じ位置に石垣のような表記が見られます。この頃まで石垣の一部が見えていたのかもしれませんが。また、古くから地元に住まわれている方からお聞きした話では、対岸（川の東側）の護岸工事以前は石垣のようなものが見えていたとか。もしかすると対岸の橋土台も残っているかもしれません。



江戸時代の川岸推定線（城下側）



昭和32年（1957）の構口橋（左は南から、右は東から撮影）【松本功氏寄贈】

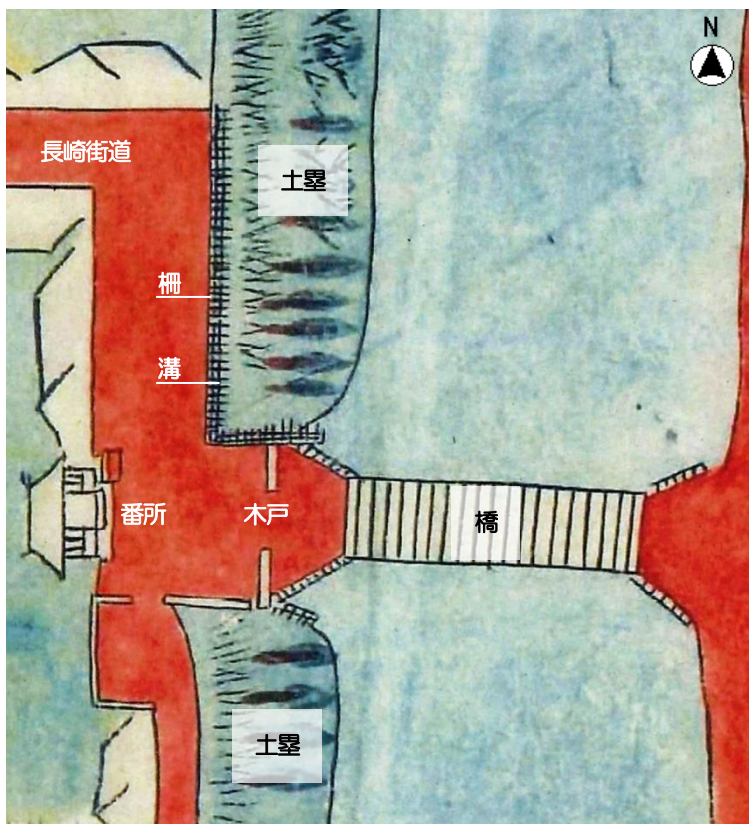
8. 牛嶋口の整備 -要衝地点の意識-

「牛嶋村絵図」を見ると、城下側は枡形の街道に土塁、溝、柵が築かれ、番所の前面は広い空間となっており、防衛上の要衝地として整備されていることがわかります。

土塁は削られてしまい痕跡を留めていませんが、発掘調査によって土塁と街道の境に築かれていた溝と柵の一部と考えられる柱穴を確認することが出来ました。また、街道にあたる部分の地盤は、砂と粘土を細かく互層につき固められ、その厚さは1メートルほどを測ります。人や荷車などが往来するだけのためには必要以上に強固な整地がされています。ここまでの理由は何か？この場所に対する佐賀藩の特別な意識がうかがわれます。

トピック

絵図の中で牛嶋口の様子が最も詳しく描かれている「巨勢郷牛嶋村絵図」は1785年(天明5年)2月に完成しますが、そのわずか8ヵ月後の同年10月、牛嶋町で火災が発生し、36軒の家屋とともに絵図に描かれていた番所も焼失しています。木戸や橋への言及はありませんが、何らかの影響があったとも考えられます。その後、番所はどうなったか？「元の位置から西へ2間引いたところで葺造りにして見栄えよく建てるように」と文献には再建計画が記されています。



整備された牛嶋口



砂と粘土を突き固めた街道の基盤



街道と土塁の間に掘られた溝の一部

9. 牛嶋口 -往時の風景-

佐賀城の「本丸より道則千弍百四拾四間」に位置する牛嶋口は、東大手口ともいわれるように城下にある他の口のなかで最も格式の高い位置づけであったと思われます。このような意識の基に築かれた石垣は、ここを通過する人々、特に藩外者に対して藩の技術力の高さを見せる意図がうかがわれるものです。また、詳細な記録がなく、発掘調査でも痕跡を確認できなかった木戸のほか、橋や番所も見栄えが美しい立派な造りであったと想像されます。

トピック

人物：(伊能忠敬 ケンペル シーボルト 吉田松陰 永井玄番)

動物：(象 ラクダ ダチョウ トラ 孔雀)

物：(砂糖 薬種 時計)

など、様々な人物や物がここを通過して佐賀城下を訪れ、また江戸や長崎方面へ向かいました。



牛嶋口イメージ図

10. 牛嶋口発見の意義 -残された奇跡-

発見された遺構は、失われた橋の構造が推定できる全国的に見ても数少ない類別です。また、佐賀城下で長崎街道関連遺構が明確な形で初めて発見され、城下の要衝となる東入口の位置を特定できたことは、地域歴史の一端が明らかになる意義あるものになりました。

明治時代以降、主要道路に架かる橋の多くは近代的な橋に架け替えられ、古い時代の痕跡は失われてきました。しかし牛嶋口の場合、場所をかえて新たな橋が架けられ、その後も大きな開発の手が加えられなかったことで遺構が残り、地域の歴史を物語る貴重な遺産として現代に再び姿を現しました。



牛嶋口跡から佐賀城下を望む（東上空から 2016年12月撮影）



発掘調査地全景（東上空から 2016年12月撮影）